

小田実

氏右太閤記



氏岩太閤記

小田実

朝日新聞社



民^{みん}岩^{がん}太^{たい}閣^{こう}記^き

一九九二年四月一日第一刷発行

著者 小田^{おだ} 実^{まこと}

発行者 木下秀男

発行所 朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地五-13-2
電話 ○三-三五五-〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇-一七三〇

印刷所
製本所

大日本印刷

・定価はカバーに表示してあります

©Makoto Oda 1992 Printed in Japan

ISBN4-02-256397-4

民岩太閤記・目次

序	11
第一章 チリアクタ 有馬の湯の巻	26
第二章 チリアクタ ボーイズ・ビー・アンビシャスの巻	40
第三章 エベッさんの港の巻	52
第四章 出師・途上の巻	64
第五章 ビラミッド形成の巻	80
第六章 トン坊、首船着到の巻	95
第七章 トン坊、名護屋御滞在の巻	109
第八章 国境の島の巻	125
第九章 釜山着到の巻	140

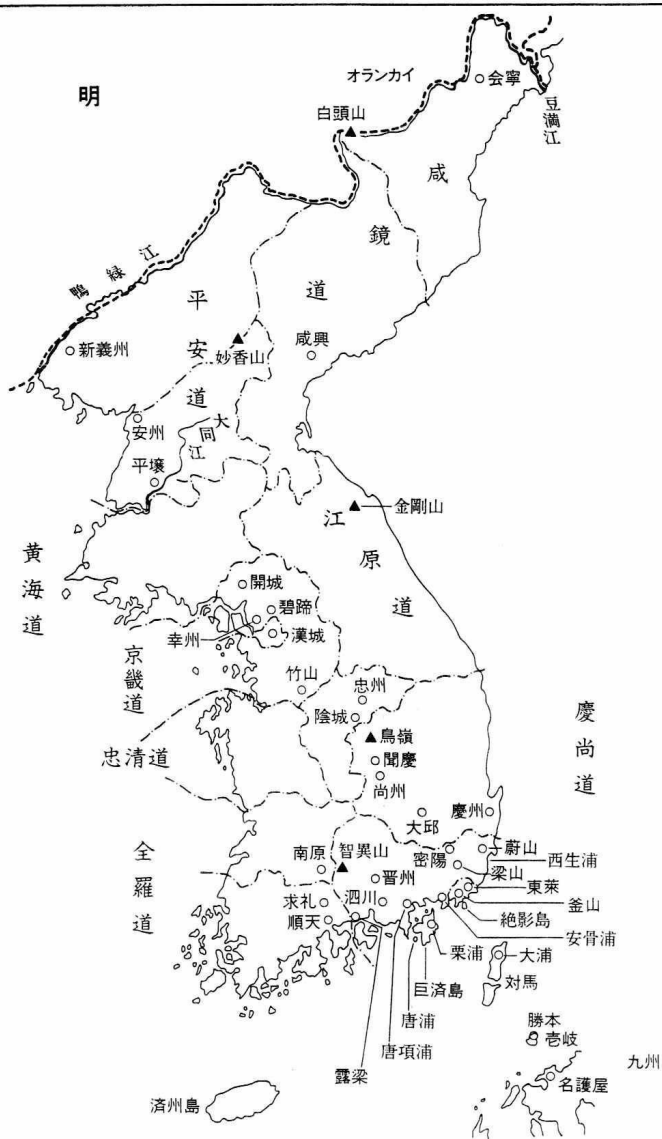
第十章	クグツいくさを語るの巻……………	157
第十一章	お坊さんとさるみと商人の巻……………	175
第十二章	海上はるかをめざす巻……………	191
第十三章	トン坊、鳥嶺の険を越えるの巻……………	207
第十四章	氏素性と大土木工事の巻……………	223
第十五章	大同江見参の巻……………	237
第十六章	平壤「平安」逗留の巻……………	253
第十七章	ミン坊、ツヅラからいくさに初見参するの巻……………	267
第十八章	ウォルヒャン様と対面の巻……………	282
第十九章	妓生・石將軍「ひとり義兵」の巻……………	298

第二十章	政治浪人・政治ゴロ出現の巻	316
第二十一章	「日増しに味方は薄くなる」巻	330
第二十二章	大敗戦と坊主義兵見参の巻	344
第二十三章	倭奴 ウエノム のバルチャの巻	359
第二十四章	石は浮き、木の葉沈むものの巻	374
第二十五章	「大明之勅使」大歓待の巻	390
第二十六章	イボとり大いくさの巻	405
第二十七章	トン坊、ヘソンに再会するの巻	420
第二十八章	イノムチャシギの巻	435
第二十九章	七色の虹の道筋の巻	451

第三十章	紙の上のゲームの巻……………	467
第三十一章	サル芝居のサル談義の巻……………	481
第三十二章	明正使御逃亡の巻……………	497
第三十三章	天変地異あつて地固まらずの巻……………	514
第三十四章	窮兵修羅の鼻のいくさの巻……………	529
第三十五章	即席、お手軽「洗札」と陶工受難の巻……………	546
第三十六章	「人あきない」と「御儒者」の巻……………	562
第三十七章	滄海茫茫の巻……………	579
第三十八章	それぞれに御対面の巻……………	596
第三十九章	東征軍城攻めの巻……………	610

第四十章	「生き地獄」出現、終結の巻……………	624
第四十一章	商売にいくさを乗せる巻……………	640
第四十二章	ゆめがゆめにあらずの巻……………	656
終章	「知らぬ」の巻……………	672
あとがき	……………	689

「民岩太閤記」関係地図



装 幀・田村 義也
本文挿絵・玄^{ヒヨシ} 順恵^{スナエ}

(カバー、表紙、扉絵・韓国陸軍士官学校
陸軍博物館蔵「東萊府殉節図」から)

民岩太閣記

「民岩之可畏如是矣」（姜沆『看羊錄』）

序章

一

何んの関係もないようなことから書く。

もう何年もまえのことになる。東南アジアを旅して歩いたときの話だ。

インドネシアの有名な週刊誌に、「テンポ」というのがある。週刊誌と言っても、裸の女性の写真やスキヤンダルの記事で売っている雑誌のことではない。ニュース雑誌で、言ってみれば、アメリカ合州国の「タイム」だ。表紙も編集の仕方も、「タイム」そっくりである。それも道理、「タイム」を真似て、「テンポ」はできていた。「テンポ」という題名も、「タイム」から来ている。つまり、インドネシア語で「時^{タイム}」ということだ。

インドネシア語を知らない私には中身はまるつきり読めないから保証のかぎりではないし、今はどうなっているか知らないが（まだ出ているはずだ）消息通の人びとの評判ではアメリカ合州国の「タイム」より政治傾向は数段進歩的だということであった。あるいは、これは逆に、インドネシアの政治風土のなかでは、「タイム」ごときものでも、進歩的とならざるを得ない、あるいは、そうみなされざるを得ないということであるかも知れない。編集部を訪ねて二、三人の記者としゃべった感想から言えばそういう印象になるが、「テンポ」は政府ににらまれてつぶされなかったこともあったし、

たしか主筆も投獄のうき目にあっている。

ただ、私がここで書くとうとしているのは、そちらのほうのことではない。「テンポ」は、さつきも言ったとおり、「タイム」そっくりの姿かたちをしている。表紙にも、「タイム」のように、なかで記事になっている人物の顔が大きく出たりする。たいてい「時の人」の顔である。私が何年かまえ東南アジアを旅して歩いていたところに、見慣れた日本人の顔が「時の人」として大きく出ていた。写真だったか、絵だったか、それは忘れたが、とにかく、街の雑誌売場で、派手に扱われている彼の顔を何度も見かけた。

それが誰だったかは、私がジャカルタの街で輪タクの運転手と交した会話を書けば、すぐ判明することだろう。たまたま英語のカタコトをあやつる運転手に、私は行きあっていた。

「あんたは日本人だろ。あんたの国はいい国だね。」

「どうしてかね。」

「小学校しか出ていない男が総理大臣になれるんだから。おれの国では、絶対にそんなことはないよ。」

彼は本当に羨望に満ちた眼で言った。

総理大臣になったばかりの田中カクエイ氏のことは、そのころ、ジャカルタに限らず、東南アジアのあちこちで話題になっていた。それも、輪タクの運転手のようなチマタの人ちゅうのチマタの人のなかにおいてである。もちろん、カクエイ氏の政治傾向、「日本列島改造」のような彼の哲学、政策を彼らが論じていたわけではない。まして、彼の金権的体質をとにかく言いあっていたのではない。そんなことは、「今太閤」として彼をさかんに持ち上げていた当時の日本の新聞雑誌も書かなかったのだから言うはずはない。カクエイ氏がアジア旅行に出かけて、あちこちで学生たちがデモ行進で迎えるというようなことは、もう少しあとで起こったことだから、話題はそちらのほうのことでもなか

った。

話のもっぱらカクエイ氏の出自のことに集中していた。つまり、小学校しか出ていない男が、アメリカ合州国、ヨーロッパに伍しての大金持ち国、「先進大国」の総理大臣になったということについてである。よくもまあなれたものだということから、おれの国、おれたちの国ではそんなことはあり得ない。話はそういうぐあいになる。そこに行きつく。

もちろん、日本をバカにして言っていたことではなかった。さっき書いたジャカルタの輪タクの運転手のように、だから、日本はいい国だと結論はそういうことになっていた。

なるほどカクエイ氏という人物、日本人にとってだけ、「今太閤」であるのではなく、アジアの人にとってもそうあり得るのだと今さらのように思ったのは、そのときのことだ。アジアの人と言っても、輪タクの運転手のようなウダツの上がらぬ社会の下のほうにいる人たちである。私の言い方をすれば、まったくのチマタの人びとである。少しかまえて言えば、民衆である。

そういう人たちにとって、小学校しか出ていない男、つまり、自分の同類のような男が自分の国より格が上の——そう彼らの目に見えている「先進大国」の総理大臣になる、なり上がるといふようなことは、何ほどかの快挙であつたにちがいない。何か胸のつかえがおりるようなユカイなことでもあれば、いつも自分たちが踏みつけにされている自分の国のえらいさんたちに対する意欲ばらしの感じのすることであつたかも知れない。そういう自分の国のえらいさんより、日本という「先進大国」の総理大臣は格が上で、その格の上の人物に小学校しか出ていない、自分と同類のような男がなる、なり上がる。(ざまあみやがれ)とまで彼らが思ったのかどうか、そこまでは知らない。ただ、カクエイ氏、そのころいつとき、アジアの民衆にとっての「チマタの英雄」であり得ていたのではないか。こういうことのありようは、カクエイ氏を当時「今太閤」としてもてはやした日本の内部の事情によく似ている。小学校しか出ていない男が東大出の秀才どもがガツチリと支配を固める権力の頂きに

立って、逆に秀才どもをアゴで使う。これはそれこそ「ニイガタ県」の人ならずとも、あまたのチマタの人にとって何かしら小気味よいことであつた。そして、世に「ニイガタ県」はまことに多いものだ。日本ばかりにあるのではない。世界にもあまたあつて、「ニイガタ県」は、どこでどうあれ、それぞれに自らの「ニイガタ県の英雄」を必要とする。

つまり、「英雄」はカクエイ氏でなかつてもよかつたということだ。その証拠に、カクエイ氏のことを言い出したジャカルタの輪タクの運転手は、彼の名前を知つていたわけではない。ただ、「小学校しか出ていない男が……」とだけ言つた。

二

正直に言つて、私は「太閤さん」のことなど、長いあいだ、頭の外に放り出して生きていた。小学校以来——いや、私の入つた小学校は後半「国民学校」と名を変えていて、卒業したのはたしかに「国民学校」のほうだから、これは国民学校以来と言ふべきかも知れないが、とにかくそんな年齢からのことだ、「太閤さん」を私が頭の外、つまり、私の世界の外に放り出して来たのは。——

「太閤さん」は、とにかく昔はえらい人だつた。「国民学校」の「国史」の教科書で私は何を習つたのかよくおぼえていないが、とにかくえらい人だつたということになつてゐた。ただ、子供のときは、いや、年をとつてえらくなつたあとも、サルのような顔をしていて、背丈も小さい。その小さい、サルの顔をしたのがいばつて歩く。ゾーリ取りをしていたときには「日本一のゾーリ取り」になろうとして、主君織田信長のゾーリをふところに入れてあたためた。しかし、「天下一統」なしとげて「天下人」となつてからは、豪華ケンランの御殿をつくり、大花見、大茶会をし、えらい人であるがどこか人間臭く、にくめない。それに反して徳川家康は……というぐあいに私の「太閤さん」理解はなつ